

平和から生まれる幸せ

那覇市立天久小学校五年 知念 慶

「アメリカも戦争になるの？」

ぼくがテレビをつけると、アメリカの大統領がイランを攻撃したことを伝えていた。ぼくの頭の中には、沖縄戦について学んだときの光景が思い出された。平和学習の時に見た白黒の写真からでも、悲惨さが伝わる。数えきれないほどのミサイルが飛んでいる様子や傷だらけで無表情の子ども。ニュースを伝えるテレビの中でも、上空にミサイルが飛び、爆発で煙が上がり、けたたましい警報音がなり響く。ぼくは、またあの時と同じようなことが起こるのではないかと不安になった。沖縄戦で多くの人の命が奪われたことをぼくは知っている。そして、そのことが今も変わらずおじいちゃんの心に傷を残していることも。

ぼくの祖父は小学生の時に戦争を体験している。戦時中は毎日食べるものもなくひもじい思いをしたこと。たくさん死体の中をにげ回ったこと。大好きなおばあちゃんを亡くしたこと。戦争の話の時は、決まって悲しそうな目をしている。思い出したくもない、辛い記憶なんだと感じる。

「今は、平和の方がいいってだれでも分かっているさーねー。」

最後には確認するようにぼくに問いかける。明らかにぼくとは全然違う小学生時代を過ごしている祖父。高学年はほとんど学校には通えなかったことも話してくれた。もし今のぼくに同じ事が起こったらと考えると恐ろしい。それでもつないでくれた命。だからぼくは今ここにいる。命をつないでくれた祖父にありがたいと思う。

「けいはバスケットがなんばってる？学校は楽しいねえ。」

ぼくのがんばっていることや楽しく過ごしている話を聞くと嬉しそう

に笑ってくれる。祖父と話すと、平和だからぼくの小学校時代は今あって、楽しく過ごせているんだと改めて思うことができる。もつとがんばろうと思える。平和な時代に感謝することができる。

ぼくは、四月に旧海軍司令部壕へ行った。ぼくは海軍がどうして陸にいるのか不思議に思った。沖縄戦が始まる頃には、海軍艦艇は壊滅状態だったことや海軍小祿飛行場の防衛の目的から設立されたことを知った。ぼくはこれまでチビチリガマやシムクガマを訪れたことがあるが、そこは自然のどうくつを利用した隠れ家だった。でも、今回訪れた海軍壕は、海軍の人達がつるはしを使い5ヶ月もかけてほった秘密の人工的な手作りの壕だった。実際に入ってみると、写真からは想像もつかないくらい、大きく感じた。米軍からの激しい艦砲射撃や空しゅうが続く中、海兵隊約四千名は狭い壕内で息をひそめていた。水や食料がない上、壕の中はいろんなにおいがひろがり苦しい環境だった。「最後の出口」と説明書きされた通路があり、そこから出るとう二度と帰ってこられなかったそうだ。この壕では、米軍が押し寄せてからたった十日間でやく四千人の方が命を落とした。本当に意味のある戦いだっただろうか、ぎ問に思う。だって、だれも幸せにならない。壕の中の人達のことを考えると、苦しみ、恐怖、そして悲しみしか出てこなかった。今、平和なことは本当にありがたいことだと感じる。ぼくは、海軍壕を歩いていて気づいたことがある。それは外国から来た方もたくさん訪れていることだ。かみの色、はだの色のちがう人、言葉がちがう人。どの人も真剣に資料を見つめ、何かを話している。どの国の人も沖縄戦から、平和について考えるためにきているのだと感じた。

今、世界各地での戦争や争いのニュースを目にする。でも、世界には平和について学び、平和を祈っている人もたくさんいる。だから、世界中が平和になる日だってくると思う。平和からしか、幸せは生まれないのだから。